

ドイツ・オランダ・ベルギーの墓地と 火葬場の近年の変化

～市民の意識と経営的な変化～

槇村久子

はじめに

日本は少子高齢人口減少の大きな社会変化の中で、葬送墓制が大きく変化している。これまでヨーロッパ各国の墓地調査をしてきたが、今回は近年の変化の特徴を捉えたい。

特に、戦後生まれのベビーブーム世代が高齢化しつつある中で、ヨーロッパにおいても同様の状況が起きつつあると考えられる。その中でドイツ、オランダ、ベルギーの中心都市のいくつかの墓地と火葬場を2019年7～8月に現地調査と同施設の責任者にヒアリングを実施した。調査地は同地域の主要都市であるベルリン、ハンブルグ、アムステルダム、アントウェルペン、ブリュッセルの特徴的な墓地と火葬場である。ここで述べる「火葬場」は日本の単独の火葬場と異なり、葬儀場や家族のお別れの場、レストランやカフェを備えた空間である。また墓地は同敷地にあり、一体的である。

本稿はこれらの墓地と火葬場の歴史と現状、そして現在起きている葬送墓制に対する市民の意識や経営的な変化の概略をまとめた。

1. ドイツ／ベルリン市バウムシューレンベグ火葬場と墓地

バウムシューレンベグ (Berlin-Baumschulenweg) 火葬場と墓地はベルリン市営で市郊外にあり、緑の美しい樹林に囲まれた道路沿道からは公園に見える広大な敷地である。門の近くに花屋がある。旧火葬場時代からある門をくぐると、並木の向こうに森の中に50m×70m 高さ11m のコンクリート建築とガラ

スの開口部の、素晴らしい建築空間である火葬場、そして周囲に旧来と新墓地がある。

〈火葬場〉

1911年からの火葬場は、第1次大戦で破壊され、現在の建築は1999年にシャーロット・フランク設計によるもので、完成に4年間かかっている。建築の構成は、左右同じの直方体の構成で、入り口ホールに29本の柱があり、床の中央に真円の水盤がある。よく見ると天井から細い糸で錘が下がっている。柱は森の木のイメージで、上に窓明かりを取り込んでいて、エジプトの寺院建築を模したようだ。周辺の壁の下の所々にへこんだ部分に砂の箱がある。砂を通して、「死」という終わりを象徴。先に述べた水盤の泉と錘の卵は「生」を象徴し、生と死の循環を表しているという。(写真1)

この天井の高いホールではコンサートが開かれ、年に1回見学会やイベントが行われている。

葬祭場は薄いブルーの空色の色調で、窓は外の天候に合わせて調整している。

宗教は、キリスト教にこだわっておらず、利用者に対応している。カトリック、プロテスタント、ロシア正教、仏教にも対応している。ドイツの人口は約8289万人（2018年）で、ベルリンの人口は約357万人（2016年）。主な宗教はカトリックが29.9%、プロテスタントが28.9%、イスラム教2.6%、ユダヤ教0.1%である。

ドイツの火葬率は2017年で62.0%であり、棺で行う葬儀もあるが、骨壺で行う葬儀が多いという。

タイの仏教の人で6時間待っていた人がいた。自国に遺骨を持って帰りたいので、火葬し、ベルリン市に死亡届を出して、タイに帰ったという。ドイツでは、在留外国人は約911万人である。

火葬の立ち合い希望者は20%ある。地下に火葬炉があり、遺体の冷蔵室がある。冷蔵室は多くの棺が保管されている。死因を特定するため、法医学の医師がサインをするまで検死を待っている。焼骨は火葬終了後に粉骨にされ、骨壺



写真1 バウムシューレンベグ火葬場・葬儀場



写真2 同墓地の新たな自然型共同墓所

は宅配サービスが利用される。

〈墓地〉

バウムシューレンベグの墓地は、古い墓地から新しい墓地へと変化が続いている。火葬場の建物横の古い墓地は、継承者もないようで、墓石は倒れ荒れ放題である。道路に近い場所には、区画は小さく新しい墓石の形の墓が並び、花が添えられている。最近造られたと思われる区画は共同墓所がいくつか建てられている（写真2）。また壁墓地もある。

以前（2008年）調査した時に、既にあった個別墓所が何段階か積まれた立体墓地や、サークル型でその中に多くの個人が地中に納骨した墓地がある。前回訪れた時はサークルの周辺（縁石）にお参りに来た家族が持参した花が多く添えられ花壇風に見えた。今回は、そのサークルが墓所とは気づきにくかった。つまり、死者の遺骨を埋蔵してから年月を経れば、そこは墓所だとわからないくらい、墓地の樹林地に溶け込んでしまっている。新しく遺骨を埋蔵した家族があったことを示す新しい花束が目についたので、以前見たサークルの墓所だと気づいた（写真3）。墓地は20年間の有期限で、多様な形態があり、現在のニーズに対応してきている。

ドイツでは散骨は遺灰だけ撒くのは法律上禁止されている。樹の横に骨壺だ



写真3 サークル型共同墓所と年数が経った墓所

けを埋める。また骨壺を納めても良いという森に、樹を見つけてから埋める。海への散骨は届け出が必要であり、岸から離れていること、岩塩など海水に溶ける材質の骨壺であることが条件である。

ドイツは連邦制で各州は火葬場をもっていて、大半の事業費はベルリン市が負担している。現在2カ所あり、1年に1万6000件。ベルリン市郊外にあるが、州を超える利用はむつかしい。土葬率は1～2%だけで、イスラム教にはまだ対応できない。

長い経験を持つ同施設の責任者（所長）のマベンフローランニック氏は、「最も大事なことは、利用者の気持ちを落ち着かせることだ。親族は亡くなってあわてている。話を十分聞いて、何を求めているのか、カウンセリングすることが大切である」と言う。求めに応じて、6つのスピーカーで音楽を流したり、パイプオルガンも演奏する。

2. ドイツ／ハンブルグ市フリードホーフ・オールスドルフ墓地と火葬場

ハンブルグ市にあるフリードホーフ・オールスドルフ（Friedhof Ohlsdorf）墓地は、世界で一番広い公園墓地だと言われる。敷地は約400ha（389ha）ある。墓地の入り口から端まで歩くと2時間はかかる。スウェーデンのストックホルム市の森林墓地スコークスシュルコゴーデン（Skogskyrkogarden）は有名だが、



写真4 オールスドルフ墓地正面入口管理事務所



写真5 墓地の中を走る広い道路

そのモデルになったのがこのフリートホーフ・オールスドルフ墓地といわれる。

オールスドルフ駅の道路を挟んで前にあり、駅中の店にも花屋があり、駅を出れば、ホテルや店周辺は墓石店や花屋がたくさんある。その前を多くの通勤者がバスや鉄道に乗り降りする。

同墓地は120年の歴史があり、元々町の中心部に墓地があったが1882年に始まる市内教会墓地の閉鎖により、町の拡大により狭くなり、この郊外に移転した。駅前の大通りに面して、古い建築様式の玄関棟（写真4）とインフォメーションセンター、横にフリードホーフ博物館、そしてもう一つの入り口は、広い駐車場のあるオールスドルフ火葬場そしてレストランとカフェがある。

〈墓地〉

墓地はウィルヘルム・コルデス（Wilhelm Cordes）によって設計され、2年間建設監督を務めた。1879年に最初の墓地管理者になり、1898年から墓地のディレクターになって38年間関った。水辺や植栽など自然の形態に近い、イギリスのランドスケープガーデンに基いている。

400haの墓地は、多くの区画があり、玄関に近い場所は古い墓地が多く、園路は曲線で、奥の区画に行くほど、新しく園路は直線に幾何学的なデザインになる。墓地内は17kmと広いので公共バスが2路線通って、バス停も23カ所ある。

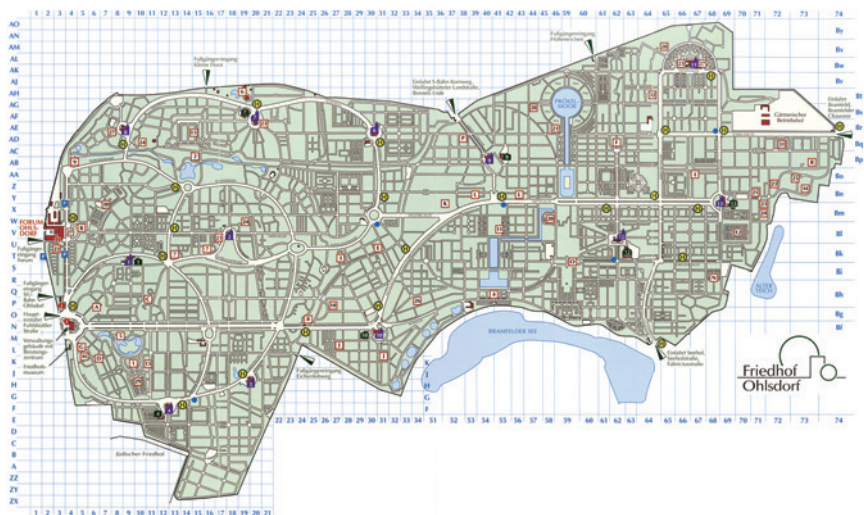


図 オールスドルフ墓地全体図

車の通行も許可されている（写真5）。またチャペルも13カ所、造園関係者の事務所も13カ所ある。広大な120年の歴史を持つこの墓地は、全体が森林であり、美しい造園による景観を保ち、そこが墓地であることを忘れさせ、公園としか思えない。（図）

針葉樹と落葉樹など450種の植物があり、歩道には樹々の種類や、野鳥の種類、ここで見られる珍しい鳥の名前も書かれていて、自然の動植物が見られるビオトープでもある。

玄関に近い区画から、特徴的な墓地区画を見よう。まず、フランス人のサビエアールのフランス庭園風で、小高い丘にイエスキリストが迎えてくれるように配置、その周辺には有名人の墓が並ぶ。バラの庭でもある。（写真6）

〈新しい形式の墓地〉

新しい墓地も開発されている。生前に申し込み、自分の墓石を選ぶことができる。2種類の墓地があり、①自分の墓所は25年間は墓石保証で、広さと場所



写真6 1905年のアルタンバーグ記念墓地



写真7 アジサイが特徴的な家族墓

を決め、申込金は1800ユーロ以上、延長も可能。遺族が決められる。②選べない場合はその人だけの場所で、家族は入れない。25年間であるが、延長は不明。敷地の4分の1の100haあり選べる可能性があり、敷地のいろいろな所にある。300haはまだ眠っている故人がいる。現在140万人が埋葬されていて、25万6000基の墓がある。毎年4500人の希望者がいる。それでもいずれ土に戻ってしまうので、新しい墓所を造ることができる、と考えている。墓地は25年間の有期限で、その後10年間の更新ができる。更新する人は1回が多い。墓石は撤去され、歴史ある墓石以外は再利用される。

多くの美しい墓があるが、中でも青いアジサイが群植された一画は、日本でもよく知られる Nivea で有名なバイヤスドルフ社創業者の墓である。(写真7)

別の新しい墓所が開発されている。敷石のような平板の墓石が2列に並んだ区画がある。そこには2つの骨壺が入る。夫婦、同性愛者、事実婚の夫婦など利用できる。石の上を歩いて語りかける。(写真8)

女性の墓地の区画は珍しい。社会で女性の社会参画が進みつつあるとはいえ、まだまだ少ない。これまで困難な中、社会に貢献した女性の政治家、経済学者、作家、医療関係者等のお墓がある。そこには、それらの女性が成し遂げた業績など見ることができる。破れない素材のペーパーがあり頁を繰ると歴史もわかる。(写真9)しかし、そうでない女性も多い。身寄りのない女性たちのお墓



写真8 夫婦、事実婚、同性愛者等新しい墓所

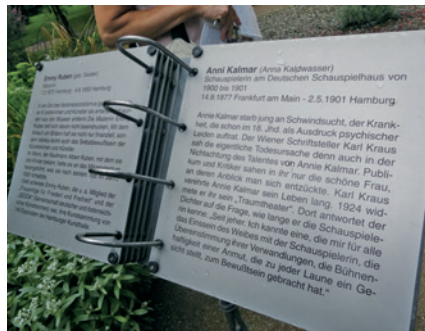


写真9 女性の業績が分かる本型の説明板



写真10 身寄りのない女性たちの墓所



写真11 管理費がかからない土葬・火葬墓所

も作られている。直接血はつながらないが、個人の墓石は残らないが名前だけは残り、この墓地に永眠できる。(写真10)

無名の墓所もある。毎年管理費はかからず、25年間造園者は定期的にケア(植物などの世話)をする。土葬と火葬の場合があり、棺は8~10体、骨壺は30個埋蔵可能で、骨壺は280ユーロである。(写真11)

子どもの墓地もある。家族の墓所にも入れるが、両親が「他の子どもと過ごせるのなら」と希望する。管理費25年間は特に安く、福祉の一環としている。一つひとつに子どもの名前を書いている。

墓地区画は霊園が基本的に管理している。葬祭業者や造園業者に区画のデザ



写真12 シューマッハ建築の火葬場・葬儀場

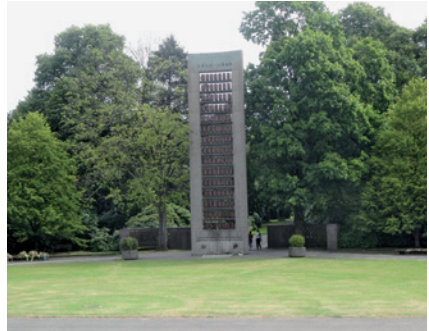


写真13 ノイエガメ強制収容所の慰霊碑

インを含めて特別に維持管理することもできる。墓石の前の小さな立札を見ると、誰が管理しているかがわかる。

広大な墓地敷地の中や外周には大小のため池がいくつかある。これは給水のためと造園の世話で植物に散水の水が必要なためである。

現在「オールスドルフ2050」と書かれた大きなパネルやパンフレットがあり、2050年に向けて新しい墓地の計画を描いている。

〈火葬場〉

火葬場は墓地入り口の近くにある。道路に面した個所は、レストランとカフェである。火葬場は、1933年に建築家フリッツ・シューマッハによる古い建築を残し（写真12）、新しい空間を付け足している。レンガ作りの重厚な建築で、ステンドグラスが美しい葬儀場の内部フリッツ・シューマッハホールは重厚なデザインである。地下に火葬炉や家族のお別れの場がある。会葬者のためのレストランは付設した新しい建築で、明るくデザインも色彩も明るい。

この火葬場建物の前に、ナチスドイツで犠牲になったノイエガメ強制収容所の故人の大きな慰霊碑ある。（写真13）

火葬炉に続く家族の会葬所で、最後の炉前の立ち合いをする家族は1～2%のみ。

火葬の前に、州の法律によりもう一度検死をする。亡くなっているかどうか、

どの理由によるのか、書類に書くことになっている。19世紀の1833年は火葬場に検死官がいた。19世紀まで火葬は反対であった。1833年、コレラの伝染病の流行により、1830年以降は火葬反対でもなくなったという。衛生面や経済面、またプロテスタントであることも影響している。現在ハンブルグの火葬率は約80%である。

3. オランダ／アムステルダム市ハーレム・ヤーデン火葬場と墓地 〈火葬場〉

アムステルダム市の郊外にあるハーレム・ヤーデン（Yarden Creamatorium Haaelem）火葬場・葬儀場と墓地は私営である。同施設はサッカー場やテニスコートがあり、周辺も開放的である。2002年に完成し、建物は、回廊やホールもガラス張りで大変明るい。建築の材質はすべて木材（集成材）である。また親族の控室や会葬者がくつろげるような、家具や調度品また箱庭もあり、家庭のリビングのようで、全体として柔らかい（写真14）。設計者はオランダのHerman Zeinstra氏である。

家族の部屋からお別れの式（葬儀）に入ると、記帳とビデオカメラがある。ホールにはモニターが2つあるが、50%の人は使用している。葬儀は45分で、ホールはガラス張りで、外の風景が見え、外にいるようなイメージである。天候の良い日は全部ドアを開けて、外でお別れの会ができる。中央に棺の置台があり、棺が下がることが多いが、上に上げることもできる（写真15）。葬儀の後、親族は50%くらいは火葬炉の前まで送る。カフェやレストランは3部屋に分かれているが、大きな1つの部屋にでもなる。2019年にエアコンを取付け改修し、さらに中庭にオープンな葬儀場も設けられた。まるで空の下のホールである。

なぜ明るい建築になってきたかといえば、オランダは暗い天気の時が多く、特に明るい時は外に出たいあこがれがあるという。葬儀の後の食事のサービスにも力を入れている。コーヒーやジュースだけでなく、ビールやワイン、各種サンドウィッチもある。遺族や会葬者に優しい心づかいの空間をつくっている。



写真14 木材や家具でやさしい雰囲気の火葬場



写真15 ガラス張りで外でもできる葬儀場

オランダの法律では1か月、ベルギーは1日、ドイツは火葬場に遺体を保管しなければならない。DNAなどの鑑定をする法律の改正が検討されている。その間に、家族はどうするかを考える期間としている。

オランダの人口は約1718万人（2017年）で、宗教はカトリックが24.4%、プロテスタントは15.8%、イスラム教は4.9%、ヒンズー教が0.6%、仏教が0.5%、無宗教・その他が53.8%（2018年）である。また火葬率は64.5%（2017年）である。

〈墓地〉

火葬後は、墓や納骨堂へ納めるか散骨がある。散骨は海がすぐ近くにあり、約25%は海に、あと約10%は散骨できる土地に散骨する。この火葬場の建物の後ろに墓地や遺灰を撒く場所もある。火葬後は約50～60%の人は遺骨を持って帰る。自分の土地に撒くのは法律で許可が必要である。約5%は役所が管理していて、いずれ散骨する。

火葬場には6か月間保管は無料だが、それで手紙で連絡しても受け取りに来ない場合、保管料を払ってもらう仕組みである。家族が亡くなって連絡が取れない場合は、10年間保管し、その後海へ散骨する。

外国人が死亡した場合、1か月でなくすぐに持って帰ることができるという。



写真16 ヤーデン火葬場・葬儀場周囲の柵墓所

葬儀はせず、火葬のみも可能である。オランダでは20%の人は火葬だけである。近年「葬式にお金を使いたくない」と言う人が増えているという。

オランダでは火葬場は公営と私営がある。この会社は、24か所グループ経営している全くの民間会社である。この火葬場の周囲に墓地も経営

している。ここでは、葬式だけもある。保険に入っている人は、自動的にこの火葬場を利用できる仕組みになっている。

火葬場は6年前は60か所であったのに、毎年5か所増加している。第二次大戦でかつては多くの方が亡くなった。戦後ベビーブームで人口が増加し、現在はその世代が亡くなっていく時期を迎え、現在年間14万5000人が死亡する。以前は火葬場建設の要望が多かったが、今は充足していると経営者は考えている。火葬は年間約1000件である。

オランダでは、土葬と火葬は14年前は火葬が50%であったが、現在は68%である。

火葬場・葬儀場の経営では、「ベルギーではサービスを良くして、利用者を増やすようにしているが、オランダは？」と。

墓地は、葬儀場の建物の周囲に造られている。墓地は大規模なものではなく、一般的な石碑の墓所もあるが、建物の周囲を囲むように回廊が設置され、柵には写真などメモリアルな品々が置かれている。(写真16)

4. オランダ／アムステルダム市ウェスターベルド墓地と火葬場

アムステルダム市郊外のサントポールトにあるウェスターフェルト墓地・火葬場 (Begraafplaats & Crematorium Westerveld) は、オランダで最初の火

葬場である。1913年まで火葬禁止であり、オランダで初めて火葬が始まったのは1914年である。そのため同地には、火葬が始まる以前からの1888年からの相当古い墓地がある。

この墓地はオランダで最初の民営の墓地で、著名なランドスケープアーキテクトのL. Zocher がデザインした。アムステルダム の裕福な住民が家族が永遠に安らかに眠れる墓地を探していて、荘園を購入したことから始まった。

その時代は、住まいの近くにはなかったが、時代が変わり、住居が建つようになり、このような環境に墓地と火葬場が立地している。

現在オランダには100カ所の火葬場があり、中には小規模の所もある。かつて遺骨は火葬場に保管され、敷地内に散骨もしていた。しかし現在では、遺骨は家に持って帰っても、川や海でも森で散骨しても、ペンダントに入れてもよい、という時代が変わってきた。土葬については、永遠に埋葬してもよい所もある。お墓は借りなければいけない。見送りの会（葬儀）も静かに行われ、火葬場そのものも見せている。

墓地は有期限であるが、自分のために購入する人もいる。1990年からコンピュータで独自のシステムを創っている。公的なものではなく私的なもので、初めてアムステルダムに造られた。近年自由化の波で、お金を持っている人もあり、都市周辺に火葬場を造ろうと考えられた。75%が火葬の時代に、要望があっ てできたが、オランダで一番美しい墓地である。オランダは平地が多いが、ここは少し丘になっていて起伏があり、美しい風景が展開する。

同地の入り口は庭園風の美しい季節の花々が咲き乱れている。玄関を入ると、さまざまな展示（骨壺の種類、ペンダント、デザインされた墓石やガラスのオブジェ等々）があり、ショウウィンドウを見ながら、選択を考えさせる。駐車場、玄関近くには、会葬者の待合やカフェ、また会葬後のレストランなどがある。

31ha の広い敷地には、古くからの建築や遺骨の納骨室、奥に行くとオランダで最初に建てられた有名な重厚なレンガ作りの火葬場がある。（写真17）



写真17 ウェスターフェルトのシンボルの火葬場



写真18 特徴的な石造りの骨壺型墓所

墓地は緩やかな丘陵地にあり、樹林地の中に各時代に対応してきたさまざまな墓地エリアがある。130年間のお墓の形態のまるで“お墓の歴史博物館”のようである。古くからある昔の墓所で、国の記念物に指定されたものがある。土葬時代の棺が入る大きさの墓所区画で、石碑がある昔風の一般的な墓所。特徴的なものは、石造りの骨壺が園路沿いに多く並ぶ区域（写真18）。様々な彫刻を墓碑とした区画や墓石自体が芸術的な形をした区画。

また、開放的な建物に骨壺を棚に置いた区画。近年は、池の縁に芝生状の散骨エリアを設けている。散骨は、池の中はだめで、海上では港の外に船で出るか、飛行機で海上に撒くのを、浜辺で見送るかである。

墓地の管理料は20年間または永久で、20年間の場合は延長することもできる。20年分前納でも、毎年納めても良い。墓所の大きさによるが、2万1000ユーロ（1ユーロ120円とすれば、252万円）。墓地の使用者がいなくなった場合は、会社が処理する。オランダでは保険に入っているの、3人まで20年契約で入れる。もちろん1人もある。墓地の使用を延長する人は50%くらいで、多くは10年間延長し、その後は無くなるという。

〈今後の火葬場・葬儀場や墓地について〉

火葬場は、かつては重く暗いものであったが、2000年頃から違った動きに

なってきた。いろいろな要素を入れて、今では人々は、葬儀にシャンパンを飲むとか、赤ワインも飲むようになってきた。葬儀や火葬の後にレストランで話も食事もはずむように。昔は教会の中で重厚にしていた時代と異なっている。

今後の葬儀や墓地については、現在このように自由な時代になっているので、これ以上変わることはないと考えている。しかし法律が規制に入るかもしれないし、もしかすれば土葬の方が増えるかもしれないという。「火葬は嫌だ」と言う人がいる。2050年頃から死亡者数は減っていくだろう。今は子どもの数は一番多くて3人で、人口は減少していくためだという。

会社として、一番古い火葬場を残して、増築や施設のリノベーションをしていく。建物も墓地も文化遺産的なものは残すつもりで経営していく予定である。市民に身近な場所ではコーヒールームやレストランのリノベーションである。

5. オランダ／メールブロエムホフ火葬場と墓地

オランダ西部のズーテルメールにあるメールブロエムホフ火葬場(Meerbloemof Crematorium)は(写真19)、建築と葬儀場(ホール)がシアター形式であるのが特徴である(写真20)。市営墓地とサッカー場など大規模なスポーツ施設に挟まれていて、墓地が隣接していることから立地した。スポーツ施設からの反対もあり、景観に配慮している。建物高さを抑えるために事務所や火葬設備を地下に配置している。池に浮かぶコールテン鋼で覆われた建物の特徴である。

同施設は2005年に建設、2006年に開館した。午前8時から夜の8時までである。2006年は515件の利用であったが、現在は年間1000件で、うまく組織しないと葬儀がこなしきれない状況になっている。葬儀場・火葬場とコーヒーを飲む場所(カフェ)は、家族だけで行う小さい規模から200人参列の規模で、最大800人可能だが、平均は100人規模である。

VIP やスポーツ選手など著名人の利用もあり、大きな葬儀もある。オランダはいろいろな宗教があり、どのような人でも対応している。プロテスタント、



写真19 市営墓地とスポーツ施設に隣接

写真20 メールプロエムホフ火葬場・葬儀場

カトリック、ムスリムなど、時間帯によって異なるので、臭いが残らないようにきれいにしている。火葬の時間は10時、12時、14時、16時である。時間の流れは、例えば会葬開始が午前8時からだと、45分は別れの時間、45分はコーヒーの会、30分は準備、そして地下室の火葬炉へと続く。親族が家にずっといて、葬儀場は使わず火葬だけの人もある。通常は、受付は地下で、火葬炉のボタンを自分で押す人もいる。「good feeling」でお世話をする。一階のフロアから地下に降りて行って、火葬を見届けるようになってきている。階上では、親族の人たちはコーヒーやワインを飲んで時間を過ごす。

このメールプロエムホフ火葬場・葬儀場は、アップルドーンに本部がある民間の会社である。同社は保険業と葬儀会社と遺体管理をしている。火葬場は9つ、墓地は2か所もっている。この場所は、火葬場・葬儀場は同社であるが、敷地横にある墓地は市営である。この地域の8割はここで火葬している。葬儀保険の加入者は、「よくわからないが、かつてと今は違う。昔は10ユーロを積み立てていた」という。

同社は民間の会社で、教会とは全く関係がなく、市営ではないので税金ではない。火葬か土葬でも可能であるし、お金のない人には市が対応している。誰が来ても受け入れており、書類を作るだけである。オランダでは人によって様々であり、葬儀をしない人もいる。葬儀会社を持っているので、葬儀社が利

用を申し込むことも多い。

ここでは、インターネットでどのように葬儀をしたいかを聞いている。例えば、音楽をしてほしいとか、ある60代の方は、シャンパンを出してほしいなどの要望がある。現在のオランダの傾向は、死をセレクトしたい、祝いたい、という。暗いものでなく、明るいものにしたい、人生の最後に、思い出をシェア、分かち合う形にしたいという。ここもカフェやその他のサービスに力を入れている。



写真21 円形壁に自然風景が映される葬儀場

この特徴である、大きなホール（式場）（写真21）の360度の壁に映し出される大きなプロジェクションマッピングはその一つである。故人の思い出によって、例えば花を選べば、2秒おきに映像が変わっていく。つぼみが、ゆっくり花開き、景色が変わっていく。オランダの自然風景、山、海辺、浜の草原等々、1つのテーマに30枚の映像があり、全部で200種類ある。シアターの専門家が作ったものだ。ホールの5台のプロジェクターからホール360度の壁に映像が映し出される。当初このホールには壁に絵画が飾ってあったという。天井のプロジェクター5台はかなりの金額だが、ビジネス的には良いと考えている。

前方に棺を置く台がある。葬儀が終わると棺は下に下がる。家族が階下に降り、火葬炉の前に行く。火葬炉は高温（650～700度）であるため、安全のため完全に扉を遮断している。家族が炉前に来るという前提で、部屋が設計されている。他の火葬場との違いは、消防署の指導により炉前ホールの天井に消火設備がある。火葬炉は連続燃焼で、もし扉が閉じなかった場合の安全対策である。



写真22 自然風景式墓地の市営墓地

〈市営墓地〉

火葬場・葬儀場の建物の横に、小川を挟んで市営墓地がある。全体の外観は森で、墓地の外周は樹林だが、中は庭園風で明るい空間になっている。せせらぎや芝生で、庭園を散策するように園路が造られている。様々な新しい墓石があるが、火葬者のほとんどが散骨であり、お墓は3%しかない。(写真22)

6. ベルギー／アールスト・シージゲム墓地と火葬場

ベルギーの人口は約1141万人（2019年）で、オランダ語、フランス語、ドイツ語が使われているのが特徴。宗教は主にカトリックであるが、近年イスラムが増えているという。このシージゲム火葬場。葬儀場は、自治体が出資する公営企業（IGS WESTLEDE）が運営している。

〈墓地〉

アールスト・シージゲム（Crematorium Siesegem Aalst）火葬場と墓地は、「自然」をテーマにしている。建築とランドスケープを一緒に計画した2018年に新しいできたばかりの所である。建物の外周に、墓地が造成されているが、気象の影響で樹木の生長がこの時はまだ十分でなかった（写真23）。骨壺の墓は花など植物で飾りたいが、夏が暑くて、花の維持管理は大変である。この場所は“自然のお墓”と呼んでいる。骨壺は粘土質で作っていて、埋蔵後2週間で土に戻ってしまう。そのため石作りのものは埋蔵できない。

ベルギーは51の自治体があるが、墓地区域にある池の端に散骨でき、フランダース州で初めてである。セントニコラウス市営墓地は森があって自然は豊か



写真23 土に戻る骨壺や散骨の自然の墓所



写真24 新築のシーゲム火葬場・葬儀場

であり、同社がマネジメントとしている。市民も自然を志向しており、このアールスト火葬場の墓地も森にしていく予定だという。

同火葬場・葬儀場（写真24）と墓地は、コンペで決まったものだが、コンペの提案の前から、考えや実現するにはどうすれば良いかと話し合われてきた。建築の事務所とランドスケープの事務所が一緒になって考えてきた。新しく土地を創ったといい、それはお墓に対する市民の傾向が、昔と違ったものになってきたからである。そこで、“自然のお墓”を創ったという。

しかし、同地の造成には20年を要した。土地を掘ったところ銅が出てきて、昔の埋葬の場であった可能性が出てきたため、考古学者が入って検証するなど、火葬場と墓地の実現に非常に長いプロセスと年月を要した。

〈火葬場・葬儀場〉

建物の中に入ると左右に2つの入り口がある。一方はレストラン、一方は受付と葬儀場。葬儀は約1時間で、小さいホールは220人の参列が可能。大ホールは600人。棺が置かれる場合もあるが、80%が骨壺を置く葬儀だという。ベルギーの火葬率は60.0%（2017年）で、近年火葬率は上昇。フランダース州は特に火葬率は高く、各地で火葬場建設が進められている。

たまたま訪問した時に葬儀があり、参列者は喪服という風ではなく、華美で



写真25 利用者中心のレストラン・カフェ

明るい色調の服ではないが、平服(日常的な服装)であった。建築としては、家族や参列者の動線や、どのようにその人々を安心させるのかを建築でわかってもらうかに重点を置いている。

建築はコンペにより10案の中から3～4点に絞られ、国やフランダース州政府などの審査員により決めら

れた。補助金は20%がフランダース州政府から出ている。葬儀の参列者の人数は地域で異なり、同施設があるフランダースでは50人～100人だが、30km離れた首都のブリュッセルでは10人と少なく、全く異なっている。

葬儀は、教会か葬儀屋か、同所で行われている。東フランダースでは1万2000人が火葬で、その内3分の1が火葬場と葬儀場が一体の所で葬儀が行われている。

葬儀場にはレストランがあるが、オープンな場所と、個室の部屋がある。レストランで食事をする人の割合は、葬儀をした2分の1である。窓の大きい、明るい広い廊下にもオープンキッチンがあり、社員が適時サービスしている。(写真25) 運営会社ウエストレーデのディレクターのハンス・アーフィー氏は、次のように指摘した。

今後の運営については、要点は4つ。①トレンドを見て変えていくこと。オーディオ、ビデオ、家具などの設備、故人に対してはもっと個人的に個性が出るように、音楽や葬式の中でコーラスやミュージシャンを呼ぶなどで、実際増えてきている。②社員教育の徹底。葬式はパーフェクトでなければならず、一番必要な事である。そのため十分な従業員と休暇など労働条件の整備。③エコロジーの時代への対応。もっとエネルギー消費の少ない火葬システムを考えている。15年前とは違い、環境問題はもっと取り組みをするため市と定期的会議を

している。④透明性と市民への理解促進。年に数回、オープンデイを開き、火葬場の透明な状態を市民に理解してもらっている。前は1000人が来所したという。

7. ベルギー／コルトレイク市アイジクト火葬場と墓地

〈火葬場・葬儀場〉

ベルギーのコルトレイク市のアイジクト（UITZICHT）火葬場・葬儀場は、ポルトガルの建築家が設計し、受賞した建築である（写真26）。建物は屋上緑化され沿道から建物は見えず、半地下に建物が建てられている。会葬者は坂道を下り、入り口に着く。建物全体はコンクリートであるが、内部の家具や調度品、床面は木製で、自然を感じさせる。2011年に完成している。

葬儀場のホールは2つあり、大ホールは200席、小ホールは45席である。年間1000件の火葬をしている。お別れの会で、その他は教会や葬儀屋です。多くの人は葬儀をしないで、火葬が多い。亡くなった人の名前、会場の案内などが受付で書かれている。同じ日の場合は、必ず30分ずらしている。

同施設は、西フランダース州の南部、人口5万人の自治体の22市町村の火葬管理協会であるサイロンが運営している。

2005年からのプロジェクトで、22市町村から始まった。建設には1000万ユーロかかった。22の自治体と銀行も出資している。利益を上げること考えているわけではない、という。コルトレイク市も墓地を持っているし、各市町村も墓地を持っている。この火葬場に隣接する墓地は同市が管理している。

火葬の料金は515ユーロ、葬儀はスタッフを使った場合は240ユーロ



写真26 アイジクト火葬場・葬儀場の入口へ



写真27 骨壺の葬儀（パンフレットから）

である。葬儀は、55%が骨壺の葬儀で（写真27）、棺を置く葬儀は45%。35km離れた遠距離の利用者もあるが、多くの家族は家の近くでするほうが多い。

朝早く午前7時半から火葬し、10時には遺骨になる。そして葬儀をして、埋葬・散骨をする人もいる。

人々の“死の受け入れ”（死の受容）は日本ではお骨拾いだいが、完全なお別れは、埋葬する瞬間、壺を置く時だという。69%が火葬だが、だんだん比率が上がってきている。1990年くらいから火葬が増え、当時は20%であった。火葬が増えた理由は、それ以前はカトリックの考え方が強かったが、今では緩くなっていること、また火葬のシステムが良くなってきていることもある。25%は教会の牧師で、教会でやっている。

当初火葬場を造ることに住民の反対があった。イメージより排ガスなどの環境面が大きかった。8年ほどかけて、住民もだんだん受け入れてくれるようになったという。

コンペには150件応募があり、20件に絞って、どういう作品か、どのようなビジョンがあるかなど審査し、論議を重ねた。さらに10件に絞って、最終5件の事務所の作品・計画が審議された。審査委員は、2分の1が住民、残りは研究者である。みんな火葬の経験のないところで、若い人も選ばれた。半地下に作った設計が気に入られた。1社は辞退した。

たまたま、骨壺を抱えた女性が自動車を取りに来たところに出会わせた。家族が来る場合は正面入り口から、業者が来る場合は裏口からで、誰が来たかがわかる。葬儀場の利用者は近隣の市町村に限られる。遠方の場合には火葬のみとなる場合が多く、後日葬祭業者が遺骨を受け取りに来る。

レストラン・カフェテリアは、ガラス張りの別棟で、墓地の横を通り、前はサッカー場である。

〈墓地〉

墓地は10年前からあり、火葬場より先にコンペが行われている。ベルナード・セキはイタリア人で、コンペに参加し、その計画案が決まった。墓地を計画した同氏は、火葬場の計画のコンペにも応募したという。

横の火葬場・葬儀場から骨壺を持って、半地下構造のコンクリートの通路を歩くと突然緑の広い空間が現れる。外に出ると、広い墓地が現れるが、実は緩やかな斜面地で、階段状になっている。火葬場の建物からは見えない。上段からA、B、C…の区画があり（写真28）、一番下の段には、散骨スペースがある。散骨スペースは広い草地で、よく見ると端に花束が置かれている。段々の壁面に、故人の名前の書かれたプレートが貼られていた。（写真29）（写真30）

横の斜面地スペースには、立体型の何段か積んだ形の納骨型個人墓や、樹木



写真28 火葬場隣のコンペで計画された墓地



写真29 散骨エリアと銘板



写真30 風景と一体の草地の散骨エリア

葬墓地等がある。墓地周囲には樹林地帯があり、地域の広大な風景がある。

火葬後・葬儀後は、30%が散骨であり、20%は遺骨を持って帰り、10%はコロンバリウムに納め、残り40%が墓地に埋葬する。同墓地は市が管理している。遠方の市町村でも、居住地でなくてもこの散骨エリア

を選べる。

カフェテリアは葬式の後だけに使用され、サンドイッチやコーヒーなどがふるまわれる。このカフェは、火葬場から墓地を横切ってくる。カフェの前は芝生サッカー場で、墓地の隣ではヘビメタルな音楽祭も開かれているという。

まとめ

ドイツ、オランダ、ベルギーの各都市の墓地、火葬場・葬儀場の歴史と変化そして現状を見てきた。国や都市によって多少異なるが、多くの共通点が見られる。ドイツ・ハンブルグ市のフリートホーフ・オールスドルフ墓地とオランダのウェースターベルド墓地は、120年以上の歴史を持ち、墓地・火葬場・葬儀場の“歴史博物館”とも言え、現在に至る変遷を見ることができる。

宗教はカトリックが多いとはいえ、その傾向は弱まり、火葬率も6割と高くなってきている。国や都市によって検死の制度があるところもあり、骨壺による葬儀も多くみられ、散骨も進んでいる。

歴史のある墓地は、先ほど述べたように墓の形態の変遷から、墓の多様性が顕著である。

外国人の在留も影響している。また、個人、夫婦、同性婚、子ども、女性、土葬、火葬、宗教の違いなど、現在の社会の多様性を墓地として対応し、その

空間を提供している。

新しい墓地は、自然型共同墓所、散骨スペースが必ずある。花壇風墓地も年数が経つほどに家族が来ることが少なくなり、自然風景に戻っていくことが分かる。墓所は有期限であるが、20年、25年後は延長契約をしない人がほとんどである。

墓地と火葬場・葬儀場とレストラン&カフェの3つがセットとして造られているのが一般的である。葬儀場とレストラン&カフェは火葬場の中にあって施設として一体化している。その建物は外国人を含むコンペによって選ばれた建築家による設計で、コンセプトとデザインはすばらしいものである。また、建築の計画・設計は建物と墓地、周辺環境はランドスケープの専門家と共同して計画され、建物と墓地と周辺の風景が融合している。特に植栽や石など緑の自然風景を造っている。また建築素材にもそれが表現されている。

それは、現在市民がどのような意識を持っているか、これまでの葬儀や墓地と異なる考え方になっているか、その変化をとらえている。「お墓に対する市民の傾向が昔と異なってきたからで、“自然のお墓”を作った」と。葬送墓制の全体テーマが“自然”である。

市民の意識の変化に、サービスとして何を提供していくのか。それは公営企業でも民間企業でも強い意欲が感じられた。火葬場では、家族が炉前に来るという前提で設計されていること、葬儀場は家族へ様々な映像や音楽の提供など、遺族や人々に空間的に気持ちを和らげるしつらえや家具等、気持ちに寄り添う安心感を与えている。

特に施設のリノベーションを怠らず、新しものにしていく。これは、ベビーブーム世代の死亡者数が増えることが予想されて、火葬場・葬儀場・レストラン&カフェの増設が進み、今後過当競争の時代に入ると考えられているからである。特にレストラン・カフェのサービスメニューとインテリアの改装が進められている。例えば、現在のオランダの傾向は、死をセレクトしたい、祝いたい、と言う。暗いものでなく、明るいものにしたい、人生の最後に、思い

出をシェア、分かち合う形にしたい、という。

そのために今後の運営の要点は、①トレンドを見て変えていく、②社員教育の徹底、③エコロジーの時代への対応、④透明性と市民への理解促進、と言った運営会社のディレクターの言葉は、これから日本にも必要とされることである。

参考文献

Entgeltregelung und Preisliste, Krematorium Berlin-Baumschulenweg, 2018

Friedhofsplan, Friedhof Ohlsdorf, 2019

OHLSDORF 2050, Hamburger Friedhofe / Hamburg / Nationale Projekte des Stadtebaus

Westerveld / 125jaar begraafplaats, 100 jaar crematorium, Begraafplaats & Crematorium Westerveld,

BEGRAAFPLAATS & CREMATORIUM WESTERVELD

PSILON, crematoriumbeheer Zuid-West-Vlaanderen

Crematorium UITZICHT

<https://www.krematorium-berlin.de>

<https://www.friedhof-hamburg.de/en/ohlsdorf-cemetery>

<https://www.bc-westerveld.nl/en-home>

<https://www.westllede.be/aalst>

<https://www.crematoriumuizicht.be>

「火葬研究23」一般社団法人火葬研、2019

<キーワード>

墓地 火葬場 ドイツ オランダ ベルギー 葬儀場